

# マンズフィールドの「幸福」について

—一つの視点—

市橋 弘道

キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield) はニュージーランドの首都ウェリントンで1888年10月に生まれた。したがって今年(1988年)は彼女の生誕100周年にあたる。こういうこともあってか、このところマンズフィールド研究にとって画期的ともいえる仕事があいついで発表されている。なかでもオックスフォード大学出版社からでた『キャサリン・マンズフィールド書簡集』(*The Collected Letters of Katherine Mansfield*) は欠かせないものである。彼女の書簡集はこれまでもマリ (John Middleton Murry) によって編集され公表されて<sup>①</sup>いた。しかし今回発表されたものは、1984年に出版された第一巻が1903年から1917年までのものを、1987年に出版された第二巻が1918年と1919年に書かれた手紙を、それぞれ収録していて、マリ編の旧版のものとは比べて分量が極めて多い。また手紙の宛先も旧版に比べてずいぶんと多彩で、それだけにこれまでは知られなかったことが多く明らかにされている。この意味からも、マンズフィールドがもっとも活躍した時期の手紙を含むであろう第三巻以降の出版が期待されるところである。さらにまたこの新しい書簡集の編者が注目される。旧版の編者マリは周知のようにマンズフィールドの夫であった。したがって古い書簡集はその内容上制約を受けていたことはやむを得ぬところである。その点この新しい書簡集の編者達 Vincent O'Sullivan と Margaret Scott の二人は自由である。後者の Scott はニュージーランドの人で、マンズフィールドの未発表の原稿の整理と復刻に従事し、1972年には 'Brave Love' を復刻出版し、また1970—74年にかけて数多くの原稿を *Turnbull Library Record* に復刻発表している。後者の O'Sullivan は1976年来日しているので知っている人もおられよう。彼は、ニュージーランド生まれの詩人、小説家で、1979年には傑作との評価の高い 'The Witness Man' でキャサリン・マンズフィールド賞を受けている。また彼は英文学者でもあ

## 2 (市橋)

り、マンズフィールドのニュージーランドにおける足跡を彼女の作品と関連させながら多数の写真を添えてまとめた *Katherine Mansfield's New Zealand* を1974年に出版している。このような二人に編まれた新しい『書簡集』はより正確でより豊かな内容を持っている。(以下マンズフィールドの手紙の引用はこの『書簡集』による。)

1918年2月12日付マリ宛の手紙に、‘...My new story is signalled.’とあって、そこに (Note: ‘Bliss’, which she worked on over the next two weeks.) と注が付けられている。この日新しい作品が着想され、以降二週間以上それに掛かり切りになる。同年2月26日付同じくマリ宛の手紙に、‘... and Ill make no END of an effort to finish this story called *Bliss*. I hope youll like it. Its different again....’と、取り掛かっている作品にタイトルも与え、内容もこれ迄のものとは異なったものであることを伝えている。何とか完成させようと励んでいる姿が伺える。二日後の28日マリに ‘Its three oclock; Ive just finished this new story *Bliss* and am sending it to you.’ とその完成を報告している。そして1918年8月3日に Ottoline Morrell に宛てて ‘I have a story called “Bliss” in this month’s *English Review*. If you should see it will you really tell me what you think?...’ と書き送り、新作が文芸雑誌に掲載されることを伝え、批評を求めている。このようにして着想され、完成され、発表された作品 ‘Bliss’ は、二年後の1920年に他の作品と合わせてまとめられ、*Bliss and Other Stories* として Constable 社から出版された。短編集の表題作に選ばれているこの作品はマンズフィールドにとって自信作であったと思われる。

月刊文芸雑誌 *English Review* はフォード(Ford Madox Ford: 旧名 Hueffer, 1873-1939) によって1908年12月に創刊された。彼は、1910年代に活発であったイマジズム運動に加わったり、その運動の中心人物である Ezra Pound (1885-1972) を通じて T. S. Eliot (1888-1965) と親交を持ったり、また *The Good Soldier* を1915年に世に出したりしている作家である。また、20世紀イギリス文学にあって今後より多くの注目を集めるとと思われる作家の一人にリース (Jean Rhys, 1894-1979: *Good morning, Midnight* [1936] や *Wide Sargasso Sea* [1966] などの作品で知られる) がいるが、彼女が世に出るきっかけとなったのがこのフォードの激励であった。その彼が、当時のイギリスには既に

高い評価を得ていた雑誌、*Athenaeum*, *Spectator*, *Nation* などがあった多くの読者を獲得していたのであるが、そのなかへ「創造力豊かな文学に対してイギリスでの機会をあたえるという明確な意図をもって」<sup>②</sup>送り込んだのが *English Review* であった。‘Bliss’ が掲載されたのはその1918年8月号(通巻117号)である。この号の巻頭三頁を飾っているのは W. B. Yeats の詩 ‘In Memory of Robert Gregory’ であって、これは1918年1月23日イタリアの前線で戦死した陸軍大佐に対する追悼の詩である。この他にも詩が十数編掲載されているが、そのすべてが軍人の手になるものである。また論文では N. Brailford の ‘Foundations of Internationalism’ が載せられている。このように、時はあたかも第1次大戦の最中であることを思わせるに十分な戦時色の濃い内容の中にあって、唯一点そのような色合いに染まっていないと思われる作品が ‘Bliss’ である。

マンسفールドとヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) との交際が始まったのは ‘Bliss’ が発表されるほぼ一年半ほど前である。ウルフが属していたブルームズベリー・グループの一員であったリットン・ストレイチャー (Lytton Strachey) がマンسفールドをウルフに手紙で紹介したのが1916年11月で、実際に二人が会ったのは1917年2月である。以来二人の交際はマンسفールドが1923年1月に死去するまでのおよそ六年間続くことになる。1918年6月には、マンسفールドが弟の死を契機に書いた *The Prelude* (*The Aloe* を改題) がウルフ夫婦が始めた印刷社 Hogarth Press から製本も手作りで出版された。この作品をウルフは、「少々水気が多く安っぽいリアリティで溢れているが活き活きとした力もあり美しい作品である」<sup>③</sup>と一応評価している。ところがこの本の完成の二ヶ月後、青い表紙の *English Review* の八月号を手にしたウルフは作品だけでなく作者をも酷評したのである。ウルフの日記(8月7日付)によると、週末や休暇を過ごすために借りていた Asheham House に独りいて、することといえば花や雲や甲虫などを事細かに観察することぐらいで、日記に書くほどのこともなく退屈していた彼女のところへ、近くの East Essex 州の首都 Lewes から使用人達が帰ってきた。彼らが持ち帰った荷物の中の *English Review* を手に取り、‘Bliss’ を見つけて、一気にそれを読んだ。その後のウルフはどうか。日記は次のように続いている。

‘I threw down *Bliss* with the exclamation, “She’s done for!”’

#### 4 (市橋)

(私は‘Bliss’を投げ捨てて、「彼女はもうおしまいだ」と叫んでしまった。)

実に手厳しい批評ではないか。では、なぜウルフはこのように酷評するのか。彼女は先の言葉に続けて次のように書いている。

「実際、女性として作家としての彼女にいかほどの信念があってこんな物語を書いたのか、私には分からない。彼女の心は露出した岩の上にはほんの1インチか2インチあるにすぎない薄っぺらな土なのだという事実を、どうやら私は受入れざるを得ないようだ。というのも、‘Bliss’は彼女にもっと深く進む機会を与えるのに十分な長さがあるのだから、それなのに彼女は表面的な小ざれいさで満足している。それに、全体の構想も貧弱で安っぽく、何ほどかの興味を寄せうる人が抱くビジョンではない、不十分なものですらない。彼女はまたひどいものを書いたものだ。読後の印象は、さっきも書いたように、人間としての彼女の冷淡さと無情さ、これだ。いずれまた読むことになるだろう。だが私の意見が変わるなどとは思われない。彼女はこんな類いのもを書き続けるのだろう。自分とマリの二人だけで満足して。……それとも、一つの作品を読んで、彼女に対するこのような個人的な批評を読み込むことはおかしいのかしら」

まるで何か個人的な恨みつらみを爆発させているかのようである。しかしこの激しい調子がかえって我々の興味をかきたてる。はたしてウルフの酷評は本当に的をえたものであるのだろうか。あるいは本当に薄っぺらな作品なのだろうか。‘Bliss’は一体どのような作品であるのだろうか。

‘bliss’という言葉は「極めて強い喜び、強い幸福感、至福」を意味する。‘Bliss’も大正14年(1924)平田禿木の初訳以来「幸福」と呼ばれているので、小論でもそれに従うことにする。さて、「幸福」の話の筋はさほど複雑ではない。主人公パーサ・ヤングが突然わき起こった名指しがたい幸福感を抱きながら外出先から帰ってくる。これが幕開きである。そして、数名の友人を招いてのパーティが始まり、談笑が続く。パーサの幸福感は次第に高まり、客の一人パール・フルトンといっしょに庭の梨の木を眺めている時同性愛によって得られるような喜びを味わう。そして今宵結婚以来初めて夫ハリーが欲しくなる。やがてパーティも終わり、客達が帰っていく。客を送りに出た

ハリーがフルトンと密かに交わす会話から、バーサは夫の浮気を知る。このクライマックスの後、バーサが庭の梨の木を眺めるところで、幕が下りる。バーサの感情の落差、すなわち強い幸福感から強烈な失意・失望への変化が巧みに描かれていて、この点では読後に鮮やかな印象を与えてくれる。ストーリーのおもしろさもさることながら、「幸福」には一種の謎解きのような面白さもある。というのもここでは、イメージやシンボルがふんだんに用いられていて、それらの意味を解き明かす楽しさを与えてくれるからである。以上のような内容である「幸福」に対してウルフは酷評を与えたわけであるが、しかし総じてこの作品の評価は悪くはない。例えばエリオット (T. S. Eliot) は「異神を求めて」<sup>⑧</sup>において、「「幸福」の中では、私の考えでは、道徳的な意味はほとんどありません。興味の中心は妻の感情であって、最初は恍惚とした悦びの感情であり、それから暴露の瞬間の感情であります。」「話は感情のこの突然の変化に限定されて」と述べ、妻が自分の夫との関係に感じた幻滅に「幸福」のテーマがあると捉えている。そしてこの作品を、「最も良い意味で、筆致の軽い (slight) もの」とであると評価している。このように評価の分かれるこの作品を、それでは一体どのように理解すればよいのだろうか。

ところで、エリオットのようにテーマがバーサの幻滅であると解釈するには「幸福」のエンディングは余りにも謎めいている。バーサが夫とフルトンとの「いちゃつき」を目撃したところから物語の終わりまでは、次のように語られている。

“If you prefer,” said Harry’s voice, very loud, from the hall, “I can phone you a cab to come to the door.”

“Oh, no. It’s not necessary,” said Miss Fulton, and she came up to Bertha and gave her the slender fingers to hold.

“Good-bye. Thank you so much.”

“Good-bye,” said Bertha.

Miss Fulton held her hand a moment longer.

“Your lovely pear tree!” she murmured.

And then she was gone, with Eddie following, like the black cat following the grey cat.

“I’ll shut up shop,” said Harry, extravagantly cool and

collected.

“Your lovely pear tree—pear tree—pear tree!”

Bertha simply ran over to the long windows.

“Oh, what is going to happen now?” she cried.

But the pear tree was as lovely as ever and as full of flower  
and as still.<sup>⑨</sup>

このエンディングからパーサの失望・落胆・幻滅、さらには怒り・憤りが明瞭に読み取れるであろうか。なるほど、ハリーの大きな声やとっぴなほどの冷静で落ち着いた態度の表現のなかに、「なにをいまさら」「よくもまあぬけぬけと」「しらじらしくも」といったパーサの気持が込められているとも考えられる。またフルトンがパーサの手をやや長く握ったり「あなたの美しい梨の木」と言ったりしているところに、パーサの何ともいえないやるせない気持ちが窺われはする。さらにまたパーサが窓のほうへ走り寄って梨の木を眺めるという行為しか描かれていないところに、反って言葉を失って唯失意に沈んでいるパーサが浮かび上がってきているとも読み取れる。しかしながらもう一つ決め手に欠けるのである。

例えば次のような解釈を取れば、このエンディングは全く別な様相を取ることになる。パーティの客達の描写のところでパーサはフルトンを、

‘.....and a “find” of Bertha’s called Pearl Fulton. What Miss Fulton did, Bertha didn’t know. They had met at the club and Bertha had fallen in love with beautiful women who had something strange about them.’<sup>⑩</sup>

と述べているのであるが、これによるとフルトンはパーサの‘掘り出し物’であり、またパーサはこれ迄にもこのような女性を見つけ出していたことが知られる。このことから、パーサがハリーに女性を斡旋する役割を担っていると解釈出来る。この解釈に立てば、パーサとフルトンの二人がバルコニーから月光を浴びている梨の木を眺める場面で、その木が象徴しているものが何んであり、また何故それなのかを理解できる。

‘And the two women stood side by side looking at the slender, flowering tree. Although it was so still it seemed, like the flame of a candle, to stretch up, to point, to quiver in the bright air, to grow taller as they gazed—almost to touch the rim of

the round, silver moon.

How long did they stand there? Both, as it were, caught in that circle of unearthly light, understanding each other perfectly, creatures of another world, and wondering what they were to do in this one with all this blissful treasure that burned in their bosoms and dropped, in silver flowers, from their hair and hands?

For ever—for a moment? And did Miss Fulton murmur:  
“Yes. Just *that*.” Or did Bertha dream it?<sup>⑩</sup>

まるで蠟燭の炎のように上へと伸び、先が尖り、明るい大気のなかで揺れ、二人の女性が眺めるにつれてますます上へと伸びていく梨の木、これはまさしく phallus を象徴している。そしてそれをパーサがハリーに斡旋しようとする女性とここで共有しているのであるから、それはまさしくハリーの phallus である。だとすれば、ハリーがフルトンを口説く現場を目撃することはパーサにとって幻滅どころではないはずである。それは斡旋の成功を意味しているのであるから。このように考えると、エンディングは全く別の様相を帯びるのである。つまりエンディングは幻滅どころか極めて強い喜び、タイトルどおり幸福を表している、ということになる。そしてテーマを幻滅とすることは困難となる。

さて、上記のような「幸福」の理解には作者であるマンスフィールドの伝記的事実がなんら加味されていない。作品の理解において、作品は作品自体で解釈する立場と作者の人生体験を加味する立場とが一般に考えられる。マンスフィールド文学においても作品を作者から切り離すべきだとの主張もあるが、総じて彼女の伝記的事実が多かれ少なかれ考慮されている。というのも、マンスフィールドが「イギリス小説においてほとんど比を見ないほどに、自己の体験をその物語に織りこんでいる」と考えられているからである。以下にこの立場にたって「幸福」を考察してみることにする。

1917年マンスフィールドはまたまた病に襲われる。夏にはリュウマチに悩み、10月には結核に冒され、11月には肋膜炎で倒れる。医者の強い勧めで1918年1月8日にフランスの南部バンドルに転地。ここはかつて1915年10月弟レズリーがフランスの前線で事故死したのを知って半狂乱になったとき、逃避したところである。そして翌年の1月から3月まで夫マリと共に充実した時を過ごしたところであった。しかし今回は一人、しかもバンドルは戦争です

っかり荒廃していた。しかし著作に専念。到着してすぐに‘Je ne parle pas français’を、つづいて‘Sun and Moon’を書き上げる。2月12日「幸福」着想。2月19日朝早くから目を覚ました彼女は、起き上がって窓を開けた。ここで彼女の日記<sup>⑭</sup>を読もう。

「シェイクスピアのあの台詞を繰り返し始めた：‘ごらん、眠りに飽きた優しい雲雀<sup>⑮</sup>は、’と。そしてベッドへ飛び込んだ。飛び込んだので咳をした。——唾を吐いた——奇妙な味がした——鮮やかな赤い血だった。その後咳をするたびに吐き続けた。——本当に耐えられないことだろう、死ぬなんて——‘屑’や‘がらくた’を残して——しっかり仕上げられたものを何も残さずに。」

最初の咯血。しかし同日マリ宛の手紙でそのことを知らせながらも、

「ちょっといやなことをお知らせします——だからしっかり私を抱いて下さい。ここ数日体調がすぐれませんでした。(中略)ねえ、あなた、病気はひどいものではありません。ベッドにずっと寝ていなければならぬほどではありません、絶対簡単に治ります。……」

と、心配をかけまいと配慮している。しかし心中の動揺は隠しがたく、翌日の20日にもマリに手紙を出した。そこには作品理解にとって重要な事が書かれているので、短いけれどもここで読んでみよう。

「…私がこの発作に襲われてから、奇妙なことが起こりました。外の世界——自然界のことですが——に対する私の愛情と熱望が突然百万倍にも増えたのです。草に咲く可憐な花や小さな流れ、それに横になって雲を見上げることの出来る場所のことを考えると——ああ、私はそれらを痛いほど欲しくてたまりません——あなたが一緒にいるそういうものを。あなたを引くと合計は零です。日中だというのに、誰かに暗い戸棚に閉じ込められてしまった小さな女の子のように感じるのです。私は、戸を叩いたり音を立てたりしたくありません、私はあなたに来てもらいたいのです、あなた自身で作った鍵を持って、そして私を連れ出して欲しいのです、そして二人で一緒に足音を忍ばせてそこを離れて、誰もが心も大きさももっと私たちに親しい、もっと心の落ち着くところへ行きましょう。

私がこの手紙を書いている時とても悲しんでいると思わないで下さい。ええ、確かに私は悲しい、でも心の奥にはあなたへの絶対的な信頼と希



望と愛があることを御存知でしょう。私は唯、お互いに率直なのですから率直に言いますが、ちょっとびっくりしただけです。——分かって下さるわね。そして私はまだ‘ふるえて’います。この言葉が今の私の気持ちをぴったりと表しています。』

咯血に苦しみ、孤独感に襲われ、しかもじっと耐えているマンスフィールドの姿が眼前に浮かぶようではないか。こんな最中にも彼女は「幸福」を書き続けるのである。2月28日「幸福」完成。3月22日戦争で混乱状態に陥っている鉄道でなんとかパリへ到着。4月12日ようやくマリのもとへ。4月29日今や名目だけの夫婦となっていた Bowden との離婚手続きが完了。5月3日マリと正式に結婚。8月 *English Review* に「幸福」が掲載される。以上「幸福」の完成前後のマンスフィールドの足跡を探ってきた。このような事実からどのようなことがいえるであろうか。ここでパークマン<sup>16</sup>の意見を聞くことにする。彼女は、先に引用した日記と20日付の手紙とをふまえて次のように述べている。

‘It is not by accident that this passage is related to the essential theme of “Bliss”——the immutability of natural beauty in the face of human disaster. That story was completed on February 28, just a week after the letter was written.’

(この文章が「幸福」の主要テーマ、すなわち人間の不幸にもかかわらず自然の美しさは不変であると言うこと、と関連しているのは偶然ではない。この物語は、この手紙が書かれたちょうど一週間後の2月28日に完成されたのである。)

パークマンは、バーサの失意落胆と美しく花を咲かせている梨の木とを対比させて「幸福」のテーマをこのように捉えているのである。この解釈は無理がなく納得のいく筋の通ったものであると考えられる。

ところでパークマンは、マンスフィールドの咯血と自然への愛情の増加との対比から失望するバーサと美しい梨の木という対比を導き出していた。実際、咯血とそれがもたらした死の恐怖といい、またバーサにおける夫の不誠実な行為が引き起こした幻滅といい、これらは確かに大きな悲しみであり不幸であろう。しかしそれらが人間の苦悩として捉えられるとき他の様々な苦悩を象徴的に表していると考えられる。マンスフィールドにしろバーサにしろ不幸と名指される色々な体験をしていたにちがいない。そこでこの点をも

う少し考察してみよう。パーサに関して言えば、彼女の不幸はなにも夫の浮気だけではない。「幸福」全体を通して眺めてみると、例えば子どもを乳母に取られているという思いとか、あるいはまた夫と心のそこから話し合えないということとか、そういった彼女の不満が描かれているのを見出だすことができる。またパーティをも心から楽しんでいるというのにはほど遠いものにも気が付く。そしてこのようなパーサの不平不満のそもそもの根源は、実は「幸福」の前半において現れる‘How idiotic civilization is!’ ‘how much more than idiotic civilization was’<sup>17</sup>とのパーサの二度にわたる叫びによって示されている。すなわちパーサの文明への幻滅が「幸福」の底流にあると言えよう。したがって夫ハリーへの失望にしろ幻滅にしろ文明批判の現われなのである。すなわちハリーは文明の象徴である。このように考えると、文明への幻滅から自然を愛することへの移行は滑らかであろう。ではマンسفールドの場合はどうであろうか。

ここでバークマンが伝記的事実を取り入れたのに倣って、マンسفールドの1918年までの人生の歩みを振り返ってみることにしよう。彼女は15歳までニュージーランドで成長した。3年間のロンドン留学後一旦帰国するが、ヨーロッパ・イギリスの文明への憧れ、なにかずく文学への熱が冷めやらず、約一年後両親の反対を押し切って渡英する。作家には‘経験’が必要だと、ボヘミアンの生活をする。Bowden と結婚するが、すぐに逃げ出す。夫のではない子どもを流産する。この間作品を書きためる。それらを *In a German Pension* として出版。マリと同棲。そして1915年。この年の10月弟レズリーがフランスの前線で事故死した。この時マンسفールドは自殺をさえしようとしたが、「私たち二人が共に生きていたあのすばらしい時間を書く義務が私にはある<sup>18</sup>」と考えて思い止まったのであった。愛しい弟の死はマンسفールドにとって咯血以上の不幸であった。この彼女が、弟の死を契機に弟と共に過ごしたあのすばらしい時間の舞台、ニュージーランドへと心を転じたのである。このように見てくると、人間の不幸と自然との関連がより密接なものとなるであろう。そしてこの場合の不幸は文明のもたらしたものであった。だとすればここでもまた文明に対する落胆から自然への移行が見られる。

では何故自然美を象徴するものが梨の木でなければならないのか。1915年7月に引っ越した No. 5 Acacia Road, St. John's Wood の家には庭があ

って、そこに一本の梨の木があった。この家にその年の10月、弟レズリーがフランスの前線に赴くためにニュージーランドからやって来て一週間滞在する。ある日夕刻、二人が未だ幼い頃共に遊んだウエリントンの 75, Tinakori Road の屋敷そしてその籬段式庭園を思い出しながら、姉弟は庭を散歩した。梨の実が一つ落ちてきた。

“Did you hear that, Katie? Can you find it? By Jove—that familiar sound.”

Their hands move over the thin moist grass. He picks it up, and, unconsciously, as of old, polishes it on his handkerchief.

“Do you remember the enormous number of pears there used to be on that old tree?”

②  
“Down by the violet bed.”

(「あの音聞いた、姉さん。気が付いた。ああ、懐かしい音だな。」)

二人の手は少し露で濡れた草の上を動く。弟が梨の実を拾い上げる、そして、知らず知らずに、幼い時と同じように、それをハンカチで丁寧に拭く。

「小さい頃あの梨の古木に実がととてもたくさんっていたのを覚えている。

「スマイルの花壇のところね。」)

このような会話を交わした一週間後、弟レズリーはこの世を去った。梨の木は、弟であり、また弟と過ごしたニュージーランドでもあった。文明を求めてやってきたイギリス・ヨーロッパで、その文明の徒花とも言うべき戦争によって愛しい人を奪われてしまったマンスフィールドは、バーサ同様に「文明なんて馬鹿げているところではないわ」と思ったことであろう。

それだけに悲劇後約二年半を経たいま、愛しい者と過ごしたすばらしい時を見つめ続けることは、幸福以外のなものでもない。

#### 註

① John Middleton Murry (ed.) *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry* (London: Constable, 1958).

② Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (London: Jonathan Cape, 1980), p. 82.

なおマンスフィールドの伝記についてこれを参照にした。

- ③ Jeffrey Meyers, *Katherine Mansfield; a Biography* (London, Hamish Hamilton, 1978), p. 142.
- ④ 幸いにも、大谷大学図書館に *English Review* が所蔵されていて、1918年8月号を手にとって見る事ができた。
- ⑤ Leonard Woolf (ed.) *A Writer's Diary: Being Extracts from the Diary of Virginia Woolf* (London, Hogarth Press, 1959), p. 2.
- ⑥ テキストにはペンギン版の *Bliss and Other Stories* (1974) を用いた。(以後 *Bliss* とする)
- ⑦ 平田禎木訳『蜜月』(アルス, 大正14年)。これには、英和对訳で表題作の 'Honey-moon' と「幸福」が含まれている。
- ⑧ T. S. Eliot, 'After Strange Gods' (1934)  
大竹勝訳『異神を求めて』(荒地出版社, 1957), 53頁。なお訳は大竹氏のものを拝借した。
- ⑨ *Bliss*, pp. 109, 110.
- ⑩ *Ibid.*, pp. 98, 99.
- ⑪ *Ibid.*, p. 106.
- ⑫ 例えば、Katherine Anne Porter, *The Days Before* (London, Secker & Warburg, 1953) 中の 'The Art of Katherine Mansfield' 参照。
- ⑬ I. A. Gordon, *Katherine Mansfield*. 斎藤美州訳『キャサリン・マンズフィールド』(研究社, 昭和31年), 4頁。
- ⑭ John M. Murry (ed.), *Journal of Katherine Mansfield* (New York: Howard Fertig, 1974). (以後 *Journal* とする)
- ⑮ 出典はシェイクスピアの *Venus and Adonis*, I, 853. なお訳は本堂正夫氏のものを拝借した。『世界古典文学全集46シェイクスピアⅥ』(筑摩書房, 昭和41年)
- ⑯ Sylvia Berkman, *Katherine Mansfield: A Critical Study* (New Haven: Yale University, 1959), p. 107.
- ⑰ *Bliss*, p. 95.
- ⑱ *Ibid.*, p. 98.
- ⑲ *Journal*, p. 38.
- ⑳ *Ibid.*, p. 34.

(拙論執筆に際し多くの方から多数の資料を拝借した。ここに記し謝意を表する次第である。)

(本学助教授 英語学)